中世の広場

渡 辺 達 三

The Square in the Middle Ages

By Satomi WATANABE

1. 序

本論は主として中世の集落・地域社会の広場について考察を試みたものである。ここに集落・地域社会の広場とは、生産・生活上の共同性の積極的な実現の場である集落・地域社会の構成員が、そのような共同性を実現する一の手段として、あるいはその結果として、彼らの日常的な生活圏のうちに主として彼らを中心に利用する広場である。

しかしそのような姿の広場は、中世においては、その時代の極限である惣村・惣町結合がなされるにいたる室町期以降においてしかみることができない。さらに厳密には、そのような結合においても、それから疎外される隷属的農民・町民が広範に存在し集落・地域社会構成員全員の自由に参加することのできる広場は、一般的にはみることができない。

中世においても広場は集落・地域社会の構成員により彼らのために設けられるのではなく、領主・土豪の名主・門閥の特権町民などによりつくられた空間を庶民がたまたま利用するという形態が一般的である。ただ、そのような空間の彼らへの解放度、彼らの利用のしかたは時代の進展とともに次第に発展していくのであり、中世の一般的な姿を静止的にとらえることはできない。たとえば中世期の小社寺数の増加には驚くべきものがあるが、そのような空間の成立は地縁的村落・都市共同体的な基盤をもつ集落・地域社会の形成・発展と大きな相関を有し、それらのうちには広場としての性格が一定程度みられるものも少なくない。

以上のような理解を念頭におきながら、2で中世の広場を成立させる社会経済的な基盤の推移と広場との関係を見、3で2、3の空間について広場的な性格がいかにその空間のあるいは機能上の特性を媒介としながら形成されていくか、ないしはその性格をみ、別稿でいくつかの集落における広場の存在態様をみるのがこの小論の課題である。

なお本稿のなるにあたり建築評論家伊藤鄭爾、千代田区立図書館鈴木昌雄の各位より多大な御教示をえた。厚

く謝意を申しのべる。

1) 渡辺達三：『中世集落の広場』（『造園雑誌Vol. 34 No. 4』）

2. 中世社会の推移と広場

ここで中世とは荘園制の成立期から近世幕藩体制の成立直前までの時代とする。中世は奴隷の農奴への進化を遂げつつある時代としてとらえることができる。家父長制の構造をもつ名体制は太閤検地の過程を経てはじめて根底的に否定されるのであり、中世においては、その極限に進展し太閤検地がそれをもつて新たな統治のための下部機構として捉えた惣村においてさえも在家・下人・所徒等と称される自立を遂げていない隷属的な層を多くその内に包含していた。それゆえ中世においては農奴＝封建的小農民が村落共同体の構成員となるところの封建村落共同体をみることはできない。中世村落の基本的構造・性格は一定地域間の名主の相互間にとり結ばれる諸²⁾関係の側面においてしかみることができないのである。それも名の規模が比較的小さく名の構造が多かれ少なかれ人組錯³⁾雑関係をもつ畿内及びその周辺の場合に限られ西国・東国等の辺境地域のように名の規模が大きく名の構成がそのうちに山林・原野・水源を包含しそれ自身で再生産の可能なまたそれゆえに名相互間の諸関係が成立しえず孤立的である場合には名主相互間の共同体的諸関係の存在の必然性を推測することができない。いずれにしても在家・下人・所徒等の隷属的生産者は小農民としての自立が確保されないうちは領主・名主を媒介としてしか自己を実現することができないのであり、その身柄さえも彼らに隷属する直接生産者相互間における地縁的・社会的諸関係の存在を推定することはできない。このような段階においては領主・名主その他の支配的階層の空間を隷属的農民が一時的・日常的に、個別的・集团的に利用することがあつても彼等相互間には何らの共同性の契機⁴⁾の生じない領主・名主に隷属する一隷属民あるいはたんにそれらの偶然的な集合による利用にすぎず、生産・生活の地縁的村落を共通にし生活感情をともにつ相互に連帯感ある人々の広場としての性格を有する空間ではありえない。

しかし、着実な生産力の増大とともに荘園体制をきりくずしていく地縁の村落の発展を時代の進展とともにみることができる。それはまず名主層の性格変化、その荘城をこえる結合による荘園領主勢力と守護地頭勢力の排除にみることができる。⁴⁾このような段階においては、社寺の境内地もそれらの名主の結合の核、あるいは祭り・集会の場としての性格をもつにいたる。荘園制の形成期においては式内社のごとく以前からあり、国家鎮護の性格を残存させている神社、荘園領主が新たに勧請した神社いずれも荘園領主の所有に属するものが多く荘の鎮守として機能したのであるが、荘園制がゆらぎ、名主間の地縁的・同族团的諸関係が生ずるやこの鎮守はどのような名主層の結合の空間として変質する場合がある。それは例えば、荘園的な関係とは別個に名主間に宮座がもたれるような場合と対応する。近江多賀社の宮座がその頭役奉仕の制において郡を単位としてなされたり、大和の大安寺八幡宮の場合には、その祭礼の頭役を勤める八条郷が辰市四個郷の随一であつて大安寺の所領ではなく明応元年8月大安寺がこれを自専すべき旨要求したさい、尋尊が祭の頭役の勤仕は自専の証文に非ず、検断等は一切辰市郷の例に従うべきであると述べていたりするにいたる。⁵⁾このようなケースは、荘園鎮守神内に置かれている土地が別の荘園の領土にあるような散在入組型の荘園においては現象としては特に顕著にあらわれるであろう。

名主の結合は畿内及びその周辺では地縁的結合たる性格を、辺境の場合には惣領制的構造をもつ同族团的結合たる性格をもつていた。地縁的結合はその範囲が旧来の荘城を超える別個のものとしてあらわれ、それは地下請・百姓請の成立および本名主層と小名主職所有者、さらにその下の名主職を所有しない直接生産者層の形成の招来と対応している。⁶⁾

直接生産者の生活・生産のための共同の基盤としての村落は上層名主層の地縁的同族团的要求よりなる党・一揆・国の諸結合の地域の内部に成熟してくる。⁷⁾その一般形成の姿は近世以降にみられるのであるが、南北朝から室町期にかけて畿内及びその周辺の先進地帯では惣に典型的にみられるような小農民の独立の進行の過程で徐々にあらわれてくる農業生産の進展と生活維持の社会的連関のなかで生じる下級名主層・小農民の地縁的結合をみることができる。表一1は中世の社寺数の動態を示したものであるが、社寺数とともに神社の増加には顕著なものがあり、これはそのような地縁的村落の形成と対応するものであると考えられる。⁸⁾

そこでは荘園制内部における名主以下の層の違いを反映した身分差を濃厚に残し、それは祭礼・宮座などの神事さらに惣の運営そのもののなかで生きていた。しかし、

表一1 中世社寺動態—建築遺構にみる—⁹⁾

時代別 地方別		鎌倉時代 A	室町時代 B	B A	神社 寺院
五畿内	神社	21	67	3.2	3.8
	寺院	93	78	0.8	
その他	神社	35	167	4.8	1.9
	寺院	73	184	2.5	
計(全国)	神社	56	234	4.2	2.6
	寺院	166	262	1.6	

自立可能な小農民層の存在が広範にみられるような先進惣村の場合には宮座なども次第にそのような小農民層に開放されつつあつた。それは、有力な名主が武士として早期上昇離村し、散在耕地が一円化され、さらに戦乱による自衛、領主に対する圧制の対抗手段などの必要が生じ戦略上、村落が一体となつて結束を図らなければならないような地域において、とくに顕著にみられるようになる。そのような場合には、ほとんど全村民ともいつてよい人々の共同体的関係が成立し、そのような人々の精神的核・集会所としての広場的空間が成立するであろう。

中世村落の神社の性格変化は、先進的、後進的な発展をとげている地帯によつて著しく異り、一般的な規定をすることはできないが、時代の大きな動きのなかでその主流を図一1のように模式的に概括することができると思われる。

- 中世第1期
国家鎮護の性格を失い、荘園領主の所領支配上の機能が実体化する
〔式内社から荘園鎮守社への変質、荘園鎮守社の新たな設置〕
- 中世第2期
荘園鎮守社に名主間結合の核・集会の場としての機能が芽生える
- 中世第3期
荘園鎮守社としての機能が弱められ名主間結合のそれが実体化する
〔荘園鎮守社の変質、名主間結合の場としての新たな神社(中・小社)の設置〕
- 中世第4期
名主間結合の神社に直接生産者間の結合・集会・レクリエーションとしての機能が芽生える

図一1 中世神社の性格変化

以上たまたま村落の神社について考察したのであるが、同様なことは、中期以降その数を増加させつつあった都市の神社についてもみられる。また、神社境内地の集落・地域社会の共同体的な基盤を有する広場の性格は第4期においてはじめて、一般的にはその芽生えを、先進地帯においてはそれの小社における実体化された姿をみることができるが、このことは神社に限らず、多かれ少なかれ広場的な性格をもつにいたる他の空間についてもいえると考えられる。

- 1) 安良城盛昭：『太閤検地の歴史的前提』（「歴史学研究」No. 163, 164）
- 2), 3) 永原慶二：『荘園制度支配と中世村落』（「一橋論叢」Vol. 47 No. 3）
- 4), 6), 7), 10) 古島敏雄：『日本農業史』岩波書店、1956
- 5) 豊田武：『中世に於ける神社の祭祀組織について』（「史学雑誌」Vol. 53 No. 10, 11）
- 8) 拙稿「広場の歴史的研究」（修士論文）において集村化による地縁的村落の形成の核として小社寺が機能し成立する過程を島田次郎「日本中世村落史の研究」の業績より考察している。
- 9) 太田博太郎『日本建築史中世神社』（「建築学大系日本建築史」彰国社1957）の表に加筆。

3. 中世広場の諸形態

中世においても広場がそれ独自の空間として実体として成立し発展することはなかった。社寺境内地、市場、馬場等が広場を必要とし成立させるような一定の社会的条件の成熟の基盤のうえに、広場的な機能をも併せもつ空間として存在したにすぎない。しかも、それは、それゆえに何らかの形態変化をもたらすという点は管見では認められない。また、それは、それ本来の機能を減じ、そのためにその存在理由がなくなると、付加的な広場的機能が作用していてもその存在の姿を失うのである。実体をともなわない日本の広場はそのような存在基盤の脆弱さを常にはらんでいたといわなければならない。

中世においては共同体的な基盤を有する広場は一般的には認められない。ただ時代の進展とともに、より強く共同的な契機を有する集落・地域社会の広場的空間がみられるにすぎない。以下それらのいくつかについて若干の考察を試みてみたい。

i) 街区内中庭広場

中世から近世初頭にかけて、町屋に圍繞された街区内に中庭が設けられ、そこが当該街区の人々の広場としての性格を一定程度有することが推定されるが、このような空間を街区内中庭広場と名づけるものとする。

図-2は町田家本洛中洛外図屏風の戦国期のたちうり町の景観を示したものであるが、街区内中庭広場の一の典型をみせている。他の該当部分などをみあわせると、中庭には共同便所、物干場、水飲場などがあり、街区内の人々の日常生活と緊密に結びついた接触の場となつてゐることの可能性が考えられる。

図-2 たちうり町付近¹⁾

このような街区内広場は上向的な発展を遂げつつある南北朝・室町期の町人自治の日常的なコミュニケーションの一の基盤としての、あるいはその実践される舞台としての広場として重要な機能をになつていたと考えられる。しかし街区内中庭広場はあくまで共同の庭としての性格が強つづきのようによつて広場としては一定の限界を有していたと推測される。

イ. 中庭は多くの場合建築物に完全に圍繞され、街路との連絡が断たれ、街路、他の街区に対し閉鎖され孤立している。

ロ. 中庭での人々の接触は各家の私的な生活を遂行するうえでの偶然的なそれであり、公共生活実現のためのそこでの自治的・政治的な接触・集会は、中庭の利用者が主として家事の雑務にかかわる婦人、下人あるいはそこを遊び場とする子どもたちであることなどから成立しにくいと考えられる。

ハ. 街区それ自体が一自治組織体としての実体もつことが比較的少ない。京都の場合についてみると南北朝期までは坊保とくに保が中世的に編成替えされながら幕府の被支配機構の媒介環とされるほどの実体を有する生活の共同の最小の組織体となり、また南北朝・室町期以降には街路をはさみ相互に向いあふ類の集合が町あるいはその惣町²⁾³⁾として実体ある生活共同組織体としてより重要になる。後者の場合には中庭を圍繞し1街区を構成する4つの類はそれぞれ別の町に属する場合がより一般的となり、公共的・自治的生活のうえでの中庭の広場としてのになる

機能には限界があり、さらにイのように中庭が街区に閉鎖されている場合、その限界はさらに大きくなる。このような場合にはむしろ頬にはさまれ頬を結合させる街路が機能的には広場としての性格をより強く有するものであつたと考えられる。

- 1) 洛中洛外図屏風部分 町田満次郎氏蔵
- 2) 横井清：『町の景観と構造』（京都市「京都の歴史」3, 1968 72—90）
- 3) 康富記に「廿八日丙辰[○]応永八年[○]中略 如法経幡エリ物等、六角堂法師調進之間、三条面惣四町町、可知行由、被仰出云々」とあり、六角堂頂法寺が足利義満から「三条面惣四町町」の知行を得たことを知りうる。この四町町は三条大路をはさみその南北に面する室町小路一烏丸小路一東洞院大路一高倉小路一万里小路に区割される4つの町を意味すると考えられる。ここでは三条大路をはさむ北頬と南頬とが一体となつて1つの町を形成し、それらが4つあつまつて惣四町町を形成していたことを知りうる。「頬」は街区の中庭からではなく、街路よりみるときに生じる用語であり、そのような頬を結合させる街路の意義は大きい。なお「頬」は「高倉棧敷四条高倉與万里小路間北頬有之、淨居庵已下皆令見物給者也」（康富記応永29年6月7日の条）、「土郷門烏丸南西頬宿所也」（同豪吉2年6月11日の条）「正親町室町與一条間東頬可為御所之由」（同3年8月28日の条）等と康富記、東寺百合文書などの文献の上にも室町期において頻繁にみられるようになる。

ii) 馬場

京都・奈良などの大都市においては、京都薄馬場、左近馬場、崇徳院馬場、奈良天満宮馬場など、馬場は相当な数と面積があり、それらのうちには、地域住民の集会・レクリエーションの空間としての機能を併せもつものもあつた。

他の多くの空間同様、馬場も元来は庶民の自由に使用しうる性格の空間ではなかつた。とくに中世前半においてはその性格が強かつたと考えられる。図一3は平安末期頃の京都の右近馬場における5月の騎射天覧の式の武人の練習風景の部分であるが、それを見物しようとして群集した人々が神人から追いたてられ遠慮がちに見物しなければならなかつた様子がうかがえる。

このような馬場にも室町期頃からつぎにみるように庶民の一定度の集会・レクリエーションの空間となつているものも認められる。

去十九日太閤・前殿¹⁾兩御所山名申入于犬馬、場以若衆犬射之、懸御目云々。

図一3 右近馬場騎射天覧式練習風景²⁾

於東馬場鳥合在之云々、越智以下国衆罷出、古市之西興行也云々³⁾

これは奈良の犬馬場、東馬場における犬射、鳥合せの例である。

図一4は宮馬場附近の図である。宮馬場は奈良の中心よりはずれ南側にある。南北約100m、東西約60mの長方形であり、馬場から北方上方に天満社が臨まれる。これ

図一4 宮馬場及びその周辺の図⁴⁾

は奈良南北郷民及びその周辺の人々の集会・レクリエーションの場として機能した。

南北郷民等於馬場院相撲在之、百廿番之内、近来荒郷共有之、別在所ヲ相加或増番数云々、奈良中令落以外事也、当年発手北郷ニ相当、両方各度也云々、文明四年五月廿一日相撲打勝在之、其後ハ又当年在之、就中次第事仰沙汰衆召寄写之、強杉原折紙ニ枚統之⁵⁾下略これは奉納の相撲会である。つぎは同馬場における祈雨主願の猿楽の催しの計画である。南北の郷民がその費用として相撲銭をあてようとしているのがみえる。

明日馬場殿祈雨之主願猿楽可有之、南北郷民相撲銭為猿楽禄物出之、其儀如例也、就其御童子・力者等此代物出之事、郷民等雖訴甲入不出之間、如先規可聞旨披露之、致去文明二年願能、於御童子・力者者不出之旨且可札明旨仰了、仍衆中返事聞之旨会申、珍重々々、

御力者・御童子相撲銭可聞申旨、御披露候、得其覚悟候、可如下知旨之由、可然様可有御披露旨評定候也、恐々謹言

十月廿八日

沙汰衆等兼與

按察寺主御房

福智院殿坊地可有相撲銭之由相触之間、先日新儀沙汰難義旨披露之、仍無為不及催促者也⁶⁾

そして翌日つぎのように実行された。猿楽は今晴座、金鋼座、法生座の3座あり、仮屋が設けられ、正面に衆中左右に学道以下が並んでいたことなどを知らうる。

馬場院立願猿楽在之、今晴座・大藏敷之、金鋼座丈夫法生座子息^{大夫息也}以上三座也、觀世先日路次マテ下向今日不參、其故ハ、於細川方公私之芸能近日連続指合之間、不下罷云々、近日細川方事之間、寺門惣別不及是非沙汰敷、凡不得其意者也、郷銭ハ四座分ヲ支配三座與、沙汰衆中ハ貫給之云々、三輩裏頭ニテ著座云々假屋如後日正面衆中、左右学道以下、中綱・仕丁出仕大綱如薪時令下知之、

假屋修理目代沙汰、諸不守共罷出テ致其沙汰、今日床敷之云々、凡新儀與、目代又不申是非與、如何、十五番芸能云々、

また、馬場には、つぎのように、祭礼の仮屋が設けられることもあつた。

若宮祭礼馬場假屋事、諸座番匠役也

御殿 寺座番匠 御供所 同 競馬屋 同

正面之西中門^{五師三綱所} 釜口座番匠

同東中門^{寺務僧綱座} 一乘院座

東楽屋 大宅寺本座番匠⁸⁾

西楽屋 同新座番匠

これにより祭礼の馬場などにおける催し物、参加者などある程度うかがい知ることができる。さて、その馬場の仮屋設置も、つぎのように、進官領が越智方に押領され材木置場等になつているために容易にはいかなかったようである。

馬場殿假屋等作事、進官領悉以越智方之押領之間、目代方下行無之故、番匠共不致其沙汰、材木共捨置之云々、山城柚未到來分ハ、花山木不切用如例云々、所詮就条々來廿七日祭礼不定、諸頭人迷惑云々、不便、且神慮如何、可恐々々⁹⁾

馬場とくにその周辺には松などが植栽され、つぎのようにしばしば補植されることがあつたことを知らうる。

昨日馬場松小々植之、七郷人夫召之¹⁰⁾

馬場松今日又少々植之了¹¹⁾

此院南方馬場松、或一本或二本宛仰付之殖之者也、西馬場同、惣三十本計也¹²⁾

また馬場の掃除のこともつぎのようにみえている。

御成方宮井馬場掃除事、東中院大坊敷地之在家ニ仰付

之處、彼坊知行谷坊也、然而谷坊順覚法印当年田楽頭勤仕ニ、彼在家人夫召仕之間、可故實旨自龍花院方申入之、仍免之了、門跡大儀之時ハ召仕之、則先年予田楽頭勤仕時も召仕之了、今度順覚法印田楽頭之間故實之、¹³⁾

1) 尋尊大僧正記卷44文明7年2月23日

2) 平中行事絵卷

3) 同184 文龜元年4月5日

4) 尋尊筆大乘院領内指図部分 天理図書館蔵

5) 尋尊大僧正記 卷120 文明17年7月24日

6) 同 157 明応2年10月28日

7) 同 157 明応2年10月29日

8) 同 73 文明6年10月29日

9) 同 91 文明11年11月21日

10) 同 57 文明2年12月8日

11) 同 57 文明3年1月13日

12) 同 126 文明19年12月5日

13) 同 42 實正6年8月6日

iii) 社寺境内地

社寺は元来宗教的な空間であり信仰の対象である。信仰が一義的な意味をもつときそれは宗教空間であるが、人間が社会生活を営む以上信仰は個人的な側面とともに公共的な側面をもたざるをえず、とくに近代的個人の成立以前においては個人は地縁的な集団性に媒介されてのみ自己を実現することができるのであり、生産・生活の場をともにする人々が、一定の限られた数の社寺において求め実現させうる信仰は集落・地域社会的な基盤をもたざるをえず、それは同時に彼ら相互間の連帯感を醸成させるものであり、そこに信仰を媒介とする集落・地域社会の広場の存在基盤があると考えられる。支配者層の階級的・個人的な利益・個性と対応する傾向が大きい大社寺においてはその個性が強く残存する場合も多いが、

図一5 莊園の神社(紀伊国持田莊)¹⁾

莊園の東北部(八幡宮)、東南部に神社があり、農家は山麓や川沿いの大道に沿っている

すなわち、中世後半紀から近世初頭にかけて、集落・地域社会の公共生活の実権を上層名主・門閥の町人層が把握したという同じ理由がそのまま神社の祭り・宮座などの利用において下層農民・町人層を疎外することがあったが、そのように疎外された層は彼らの自立化を背景に神社の利用に彼らの意志を反映させるべく努める一方、他方で私的という一定の支配者側の了解のもとに小寺院において彼らの集会・レクリエーションの機能を充足させる合法性を獲得し、それを核とする小農・小町民の事実上の公共生活を実現していく場合も多かったのである。

さて、神社は集落における公共的な生活にかかわる度合が高く、寺院は私的な信仰に関係するという理解がある。本論ではいうまでもなく集落・地域社会の公共生活にかかわる空間を問題とするのであり、個人の私的な信仰にかかわる空間は考察のうえで一義的な意味を有しない。それゆえここで問題とする寺院も集落・地域社会的な公共性を獲得したそれであるが、このことは中世後半期から近世初頭にかけて次のような特別の意味内容をもつことがある。

しかしすでにふれたように、中世においては、集落・地域社会の共同体的基盤をもつ社寺境内地の利用は一般的には認められず、その過渡的段階が時代の進展とともにその性格を強くしていくがみられるのみである。

莊園領主は莊園統制の必要上、本所系統の社寺を莊園鎮守として勧請する場合が多く、それへの莊民の宗教的・レクリエーションの欲求の対象としての一定度の参加を認め、それを通じて支配の一つの媒介環として意図することがあつたと考えられる。しかし中世前半期にあつては莊民はその身柄さえも領主・名主に隷属し彼らを通してのみ自らを実現することができるのであり、その自立性が低いこと、さらに空間的にも散村型の集落が一般的であることなどにより彼らの間の社会的関係は成立しにくく、そのような集落・地域社会的な社寺の利用のなされ方にはおのずから限界があつたであろう。中世前半期にあつては莊園と自然村落との関係が多様であることの必然として莊園鎮守の社寺と村落民との関係は一樣ではない。集村型であつても散在入組型の莊園にあつては極端な場合には莊園鎮守の社寺がその莊域外におかれることがあり、その地縁性を獲得できない場合がある。しかし一般的に集村型とくに一元集村型の莊園においては集落民の相互間の社会的関係が比較的早期から成立し、そのような結合の核としての社寺がみられる例もある。

図一6 莊園の小寺院（紀伊国井上本莊）²⁾

図-7 小社における関³⁾

図一7、8は中世初期の小社寺における闘鶏、闘草の様子を示したものであるが、中世初期においては社寺は集落・地域社会的基盤をもつたとえば集会などを行う空

図一8 小社における闘草⁴⁾

間とはなつていず、小社寺の場合にも相互に結合された人々の集会・レクリエーションの場ではなく、ある娯楽を楽しむ偶然に集まった人々により形成される空間という色彩が強かったと考えられる。

図一9 神社における田楽⁵⁾

図一9は神社の田楽の舞の図であるが、貴人は屋内で、庶民はそのわきから見物しているのがみえる。

図一10 賀茂社の祭礼⁶⁾

図一10は賀茂社の祭礼の部分であるが、庶民は神人から追いたてられ遠慮がちに見物している様子を知ることができる。このように、比較的大きな社寺は庶民を疎外する傾向が強かったと考えられる。

国・一揆・党などの荘園制を超える地縁的・同族団的な組織の下に醸成されつつある地縁的村落においては、荘園鎮守が当該領主・荘民ではなく、そのような村落の結合の中心となることがある。荘園鎮守の社寺が党・一揆等の結合の中心となりそれ本来の意味を失うにいたる場合もある。また地縁的村落はその結合の核として新たに小社寺を設ける場合もある。このような場合には一般に地縁的村落の上層名主が彼らの結合の中心としての宮座の場として機能する。

地縁的結合の典型である惣村・惣町結合の場合には地縁的村落の発展・直接生産民の自立の過程において、宮座は、そのうちに濃厚な身分関係を反映させながらも、集落の特権的な層の独占からより広範な構成員に解放されていく。こうして先進的な惣においては社寺の境内地が村落民の重要事項の最高決議の集会場、あるいは日常的なレクリエーション地として次第に定着していくのである。奈良薬師堂惣郷では「毎事惣郷事トネ相催テ薬師堂ヲ集会所ニ合沙汰評定スル也」とあり薬師堂が惣郷の集会所であつたことを知りうる。また社寺が集会の他に集落・地域社会生活の必要に応じて種々の機能を充足していた。

南北郷於野上荒神祓在之、則一万度初之、郷々在々云々、祈雨也⁸⁾

これは奈良の南北郷の祈雨のための祓が野上の荒神党において開かれたことを示し、つぎにより奈良の平野辻堂で猿楽が催されたことを知りうる。

於平野辻堂自昨日手猿楽在之云々、京者也、兩寺佳侶見物之、甲乙人ハ銭宛出之云々、大群集也云々、⁹⁾社寺境内地は平時にあつては寄合の場であつたり、鳥合・草合・猿楽・田楽等のレクリエーションの場であつたりするが、集落が外部から攻撃されたりあるいは一揆などの積極的行動が起される場合にはその拠点となることがある。

布留社ニ引籠土民等今曉没落之間、則宮本発向、年預共集会所・氏人共集会所・年預之庵室以下、或打破放火了、物取共如雲霧、内山寺既以可令物取等乱入之条難義迷惑之处、古市自身馳向致成敗之間、無為珍重、山寺之安否此事也、河内之足輕共大勢催来云々、夕方¹⁰⁾古市ハ田村ニ陣取之、丹後市郷悉以焼払之、社本々郷これは大和山辺郡の布留惣郷々民が文明年間彼らの結合の核とする石上布留明神に引籠り、領主前福寺に対峙した一連の事件の一の寺院の記録であるが、布留社には各郷より選出された「年預共」の集会所、「氏人共」の集会所、および年預の庵室があつたことなどを知りうる。

神社の境内地は、これら社会的・政治的な集会の場としてのみでなく神事の場として重要であることはいうまでもない。春秋の祈年・新嘗を中心とする祭り、境内地

に仮屋を設けてそこにおいて共同飲食をする座の催し、定期的あるいは、祈雨などの不定期的な相撲会・猿楽などは重要な神事であり、同時にレクリエーション的な側面をもつていた。紀伊粉河寺の鎮守六所大名神の6月の相撲会では東西に仮屋が設けられ、東および荒見の両村人がそこに居並んで相撲を見物したという。¹¹⁾

- 1) 「国説日本文化史大系」5 小学館、1957
- 2) 「国説日本庶民生活史」2 河出書房新社、1961
- 3), 4), 5), 6) 「年中行事絵巻」
- 7) 原田伴彦：「日本封建都市研究」東大出版会、1957
- 8) 尋尊大僧正記 卷103 文明14年閏7月9日
- 9) 同卷123 文明18年4月8日
- 10) 同卷109 文明15年10月8日
- 11) 豊田武：前掲書

iv) 市場

平安末期からの荘園領主・地方土豪の積極的な所領開発、鎌倉期以後の集約耕作化などによる生産力の上向的な発展にともない剰余が集積されるようになるが、これの交換・流通の場としての市が、13世紀頃より多く出現するにいたる。さらに年貢その他の貢納物の貨幣化の進展は、領主・荘官などの支配的な層ばかりでなく広範な農民層をも市場への参加を余儀なくさせていった。先進地帯を中心に鎌倉末期頃より月3回の日切の定期市が形成され、京都・奈良などの都市においては毎日市が立つ場合もあった。

市場は、領主・荘官の居住地、交通の要地、大社寺の門前など流通・交換上の重要地点に設けられる場合と、小社寺の境内・門前など集落・地域社会の人々の集まりやすいそのような基盤をもつ地点に設けられる場合があった。集落・地域社会の広場の観点からは後者がより重要であるが、その成立は南北朝・室町期頃よりみることができる。

市場はいうまでもなく経済的な機能が第一義的であるが、その成立の前提としてまたは結果として、そこに多くの人々が集まることを必要とするのであり、そのような人々により醸成される集會合・レクリエーションの意義も大きくそこに広場的な機能が生ずることもある。しかし中世においては、大きな都市以外では布場は地方の中心という色彩が強く、それを核としながら集落民・地域社会構成員相互間の日帯的な集會合・レクリエーションを実現するという集落・地域社会的基盤をもつ市場広場は少なかつたと考えられる。周辺農民にとつては、むしろ、市場への参加は集落・地域社会生活の拘束から解放される非日常的なレクリエーションの実現という期待が強かつたと考えられる。

古代の市場は専制国家体制下の大きな限定のもとに一

定度の庶民の集會・レクリエーションの場としての機能を有していたことをすでにみた。中世においては市数の飛躍的增加がみられるが、直接生産者層の自立化の過程に対応して、そのような人々の意思の反映された市立が行われたり、あるいは領主のために設けられた市が一般農民の市場になつていくような例もみられるようになりそのような市の広場的な機能の増大の条件の存在を推定することができる。

東西ノ市ハ人集ル所也。其辺ニ行テ可伺也ト云ヘバ。

下郎其所ノ形ヲ取テ市ニ行ヌ。人極テ多カリト云ヘドモ。此レニ似タル者ナシ。²⁾

これは中世初期の京の東西市が人々の集合する空間であることを示している。「国ノ上下ノ人聴聞ノ為ニ来リ臨テ市ヲ成テ居並タリ」³⁾「京中上中下見物ニ市ヲ成シタリ」⁴⁾「日本国之津門前成市」⁵⁾にみられるように「市ヲ成ス」とは人々の多く集合する形容であり市は元来人々のにぎやかに集合する空間であつたことを知りうる。このような市は盛り場的な魅力を持っていたのであろう。つぎのように女性を求めて市に出かける上層民もあつた。

年中がいろいろ好みなりけるさかりに市にいきけり。中頃はよき人々市に行きてなん色好むわざはしける。それは故きさいの宮のごだち市に出たる日になんありける。年中色好みかかりてになう懸相しけり。後に文をなんをこせたりける。⁶⁾

13世紀頃よりつぎのように市場が各地に多くみられるようになった。

萱津の東宿の前をすぐれば、そこらの人あつまりて、里もひびくばかりにののしりあへり。今日は市の日になむあたりたるとぞいふなる。往還のたぐひ・手ごとに空しからぬ家づとも、女の「見てのみや人に語らん」⁷⁾と詠める花のかたみには、やうかはりておぼゆ。撰津ノ国ノ難波ノ邊ニ行ヌ。河ノ邊ニ徘徊スル間。市ヨリ通ル人多カリ。⁸⁾

龜山は。慈恩寺。新福寺。阿弥陀寺。長福寺。第四箇寺。各律院七堂みえたり。各々宿所々々東西市あり。⁹⁾延文四年己亥六月五日、常楽寺市立始¹⁰⁾

このように宿場、門前などの都市的集落には市がさかんに立ちにぎわつたことをみうるが、さらに、つぎのように村落においても同様であつたと推定される。

森の陰の一村里にて。市の商人の物きはがしきのみなり。¹¹⁾

ひざおりといへる里に市侍り。¹²⁾

市場の空間については多くを知りえないが、市場は市庭あるいは市ノ庭ともいわれ、それが一定のひろがりをもつ空間に由来する可能性を示している。

盗人此ノ盗タル絹ヲ持テ。其ノ北邊ニ有ル市ニ持テ行テ売ルニ。人有テ此レヲ買フ間。被盜テ後未ダ七日ニ

23

このような市への庶民の参加は、室町・戦国期に入つて著しく活況を呈してくる。つぎのように市の出る日に同好を求めて市屋形にて飲酒を行うという市でのレクリエーション・交歓形態の存在を知りうる。

かやうに候者はあべ野のあたりに住ゐる者にて候。けふは安部野の市にて候程に罷り出でばやと存じ候。又いづくともしらず若き男来り某が酒を愛する者の候けふも彼者を待たばやと存じ候。○中略 伝へきく白樂天が作りし酒功讃の琴詩酒の友今にしられて市屋形に樽を据ゑさかづきをならべてよりくる人を待ち居たり。²⁷⁾

市場では領主側より高札が掲げられる場合も多いが、つぎは必ずしも市場での例ではないが、庶民が彼ら相互間のコミュニケーション実現のために高札などを掲げる場合もあつたであろう。

一人出てよきむすめを以たとゆふ。うちくらひ高き人をむ子にせんとて高ふだたつ。²⁸⁾

図一三 豊前国宇佐神宮放会殿社頭市²⁹⁾

図一三は豊前国水崎村にある宇佐神宮放会殿の社頭の市

場である。毎年8月15日に行われる放生会には大鳥居前の通路の南北両側に仮小屋が設けられ、そこに唐物産が3座づつ、その後方に酒屋や茶屋・千馬市などがあり、また市場の管理者としての目代がみえる。³⁰⁾ここに戦国期の市場の空間形態を一定程度知ることができる。

- 1) 豊田武：「増訂中世日本商業史の研究」岩波書店 1966
- 2) 今昔物語巻24
- 3) 同巻20
- 4) 同巻28
- 5) 大塔軍記
- 6) 大和物語上
- 7) 東関紀行
- 8) 今昔物語 巻12
- 9) 宇長手記大永2年
- 10) 嘉元記
- 11) なぐさめ草
- 12) 廻国雑記
- 13) 今昔物語 巻17
- 14) 東寺百合文書タ（清水三男「日本中世の村落」）
- 15) 豊田武前掲書
- 16) 一遍人絵詞
- 17) 小野晃嗣：『中世に於ける門前市場』（「史学雑誌 Vol. 45 No. 4」）
- 18) 小野晃嗣前掲書、尋尊大僧正記巻154 明応2年3月8日
- 19) 小野晃嗣前掲書、一乗院文書10
- 20) 豊田武同
- 21) 小野晃嗣前掲書原図
- 22) 小野晃嗣前掲書
- 23) 嘉元記
- 24) 尋尊大僧正記巻72 文明6年7月2日
- 25) 同75 文明7年6月26日
- 26) 同108 文明15年7月17日
- 27) 『松蟲』（「謡曲集」）
- 28) 『高ふだむ子』（「狂言集」）
- 29), 30) 「図説日本文化史大系」7 小学館、1957

Summary

This is a study on the spaces as the Squares in the Middle ages.

In part 2, the relations of the Spaces as the Squares and the formative process of the socio-economic conditions which the Squares are able to exist on are studied.

In part 3, the examples of such spaces such as the courtyard places, the riding grounds, the precincts of the shrines and the temples and the market places are tried to be studied.

(45. 4. 20 受付)